

# 幼児期における自我の意味について

## —— ヴィゴツキー理論の哲学的基礎からの照明 ——

神 谷 栄 司

生物学、歴史学、心理学において、弁証法的方法はけっして単一なものではない。方法論が、つまり、その科学の範囲のなかで適用される、媒介的、具体的な概念のシステムが必要なのである。

自然科学の弁証法が同時に自然の弁証法であるように、心理学の弁証法は同時に心理学の対象としての人間の弁証法である。

—— ヴィゴツキー『心理学の危機の歴史的意味』

### I はじめに

就学前期(3歳～7歳、ヴィゴツキーの言う「3歳の危機」と「7歳の危機」のあいだの時期)に関するヴィゴツキーのまとめた理論的考察は「子どもの心理発達における遊びとその役割」(1933 / 2003 // 1989)しか今のところ眼にすることができない。「3歳と7歳の危機」(1933 / 2001 // 2012)、「遊びとその役割」の二つの講義速記録を踏まえるのは当然であるとしても、それだけでは、ヴィゴツキー理論が「幼児期における自我の意味」をどのように把握しうるのか、を十全に解き明かすことができるとはいいがたい。

ここでは少々創造的なアプローチが求められる。そのアプローチの一つの極をなすのは、ヴィゴツキー理論の哲学的基礎を掘り下げ、その最深部に見出されるヘーゲルとスピノザの哲学〔補足〕からテーマに即する考察の観点を導き出すことである。この場合、ヘーゲルの『精神現象学』に含まれる自己意識論はことに有益であり、また、ヴィゴツキーが上記の遊び理論のなかで言及したスピノザの命題(『エチカ』より敷衍された命題)も同じく考察に有益なものである。いま一つは子どもの現実的・事実的な極である。子どもの「現実」「事実」と言っても、その意味づけなしには、それを理解したことにはならないのだが、それでも、その出発点は「現実」と「事実」にある。幼児期の自我を情動と意志の観点から特徴づけたものにヴィゴツキーの「危機」論(3歳と7歳の危機、さらに13歳の危機)があるが、ピアジェは認知発達の観点から自我を位置づけている(自己中心性または認知的自己中心性)。これらは幼児期における自我の意味を現実的に理解するうえで、欠くことのできない研究である。

二つの極、すなわち、上からの哲学的考察と下からの現実的・心理学的考察とは、対象にたいする発生的・発達の観点に立つとき、お互いを補いあうものとなる。前者は後者に、より深

い意味を与えるとともに、後者によって前者は現実との連関を得て生きいきとする。こうして、小論では、現実の子どもを次のような図式のなかで考察したい。すなわち、現実の子ども $\longleftrightarrow$ ヴィゴツキー理論 $\longleftrightarrow$ ヘーゲルとスピノザの哲学。とはいえ、紙幅に限りがあるので、小論では、テーマに対する研究の基本的観点を論じることに限定する。

〔補足〕ヴィゴツキーとヘーゲルの連関については、弁証法的発想とともに、言語の位置づけにも見られる。

ヘーゲルの『精神現象学』は「感覚的確信」「いま」「ここに」ある「このもの」に関する知、すなわち知の純粹個性性から「知覚」（「机一般」のような普遍性）に移行するにあたって言語の「神的本性」、つまり神にも似た働きに言及している（1807 // 2002, c.58 // 1997）が、他方、ヴィゴツキーは、死の直前に口述筆記したと言われる『思考と言語』第7章（「思惟と語」、1934 / 2001 // 2001）で、語の2側面（言語論的・外的側面と意味論的・内的側面）は「直接的な統一」をなしながらも、ときに、連合主義的連関の観点（音声と対象の内容との連結）からは理解できないような、2側面それぞれの対立的方向への運動を実現することを指摘している。それは、子どもが獲得する初期の語は外的形相的側面（言語論的側面）においては単語 $\rightarrow$ フレーズ $\rightarrow$ 文というように「部分から全体へ」と運動するが、その意味や思考の側面（意味論的側面）においては文という全体（「一語文」）からより詳細な部分へと運動することにまず現れ、また、子どもにおける接続詞の使用が彼の同種の論理よりも先行することや、文法的主語・述語と心理学的主語・述語の不一致、寓話における主人公の動物の文法上の性を尊重することでその動物の実際の行動と矛盾する翻案などに現れている。そして同書第7章における主題のひとつ、内言の考察において、ヴィゴツキーは、外言（特に話しことば）における述語主義の内言における絶対化（「絶対的述語主義」）、また、内言における語の短縮化とかけら化という言葉論的側面の運動が意味論的側面においては意味のふくらみ（一冊の小説の内容のすべてをそのタイトルである語が表示することに類した膨大なふくらみを含む）の運動をもたらすことを解明している。これらは明らかにヘーゲルに着想を得た分析であり、そのことが『思考と言語』のこの章に生命力を与えている。その生命力の確証は、ヴィゴツキーと立場の異なるピアジェ（1962 / 1997）とゴールドシュテイン（1948 / 1965）によるヴィゴツキーの内言理論への賛意が示している。

また、ヴィゴツキーは1930年代の自己の理論的探究の指針ともなった心理システム論をスピノザと関連づけており（1930 / 1982 // 2008）、それは具体的個人のドラマの心理学（1929 / 2003 // 2008）や類型やタイプとしての人間の具体心理学（1932 / 1936 / 1984）を導いている。さらに、『情動に関する学説』（1933 / 1984 // 2006）においては、心理神経学とスピノザの関連づけ、スピノザの視点からのデカルトの情動理論批判が論じられている。

## II 自己意識 — 自我と他のもの（外的事物および他の自己意識）

まず、哲学的考察と子どもの自我を結びつけるパースペクティヴを示すために、ヘーゲルの自己意識論に対するヴィゴツキーのコメントを引用しておきたい。

〔自己意識の形成は人格の発達の個体発生の平面におけるある歴史的な段階にはかならない、ということについて〕この概念はヘーゲルの哲学にすでに見られる発達図式に照応している。物自体は発達しない形而上学的存在であるとするカントとは違って、ヘーゲルにとって『自体（即自的）в себе』の概念そのものが意味するのは、事物の発達の初期的モメントないし段階にはかならない。まさしくこの観点からヘーゲルは芽を即自的植物とみなし、子どもを即自的人間とみなしたのである。あらゆる事物は最初は即自的である〔それ自体のなかに始まりがある〕、とヘーゲルは述べている。ア・デボーリンは、この問題設定において興味深いのは、ヘーゲルが事物の認識可能性を事物の発達と一より一般的な表現を用いるなら一、事物の運動・変化と結びつけていることだ、と考えている。この観点から、ヘーゲルは完全な根拠をもって、『对自的 для себя 存在』のもっとも身近な事例は私たちにとして自我である、と指摘している。「人間を動物から区別し、したがって、概して自然から区別するのは、主要には、人間が自分を自我として知ることによってである」（下線＝引用者、1931 / 1984, c.232 // 2004）。

ここに幼児期の自我をヘーゲルの自己意識論と関連づけるパースペクティブを把握するヒントがある。発生的観点から見れば、ヘーゲルの自己意識論は「即自的な」自己意識（まだ意識されていない自我）として幼児期の自我を含みうること、しかも、それは動物と子どもを区別する指標でもあること、がそれである。

しかし、幼児期の自我を論じる前に、まずは哲学的次元において、ヘーゲルのいえば、对自的な自己意識（意識された自我）を特徴づけておこう。とはいえ、『精神現象学』では、それが考察の対象とした「感覚的確信」「知覚」「悟性」「自己意識」「理性」「精神」の各々とすべてとが流動と生成の相において捉えられているので、自己意識についても、即自的な自己意識から「自由な自己意識」への移行の過程が考察されねばならない。つまり、直接的な統一をなしている自我、「私は私である」というトートロジカルな自我、またはっきりとは意識されていない自我から、そのなかで対象が概念において運動する自由な自己意識への移行過程に、何があるのかを明らかにせねばなるまい。

ヘーゲルの観点からすれば、直接的な統一をなす「ひとつのもの」が崩れていく最初にあるものは、概して、「ひとつのもの」の内部に生じる「区別」である。もちろん、それはどのような「区別」でもよいわけではなく、崩壊が発達につながるような「区別」でなければならない。上に示したように語を例にとれば、語の言語論的側面と意味論的側面との「区別」は、連合主義的理解にとどまれば最初の音声と意味との連結がそれ以上の展開を拒む固定的で静止的な「区別」に他ならないが、両側面の対立性を許容するとき、やがて言語論的な「崩壊」（語のかけら化）が意味論的には意味の操作や「発達」の条件となるような内言の生成を準備する「区別」ともなる。自己意識の場合、そのような「区別」は、基本的には、「自己のもの」と「他のもの」との区別であろう。

そのことは、自己意識とそれ以前の意識とについてヘーゲルが行った比較によって示唆され

る。彼が言うには、自己意識という「新しい形式の知—自己自身についての知」を「それ以前のもの—『他のもの』についての知」に関連づけて考察するならば、この以前の知は消え失せるが、その知のモメントは同時に保存されている。ここで喪失するものは、「即自的である」ということ、あるいは「意識にとって単純な自立的存在」なのである(1807 // 2002, c.93-94 // 1997)。このように、自我が意識されること(自己意識の生成)によって、「他のもの」の知(感覚・知覚・悟性の知)が対自的になるのであるから〔上記引用の「『対自的存在』のもっとも身近な事例は私たちにあって自我である」というフレーズに着目されたい〕、自己意識のなかに生じる基本的な区別は「自己のもの」と「他のもの」との区別であると見なしてよいであろう。

そうであるなら、自己意識の生成過程において「自己のもの」と「他のもの」がどのように浸透しあったり、対立しあったりするのかを把握することこそ、ここでの課題となる。ヘーゲルが行った自己意識の三つの予備的规定——(a)自我についての直接的考察〔初期の自己意識〕、(b)自我の直接性の媒介性への転化、(c)自己意識の二重化——に沿って、この課題を扱うことにしよう。

自己の自我の認識は「純粋な区別されない自我」(同上, c.98)の直接的認識から始まる。それは、「私は私であるという、運動を奪われたトートロジー」(同上, c.94)にすぎない自我の認識である。それはある意味では安定した統一としての自我であるが、しかし自己意識はそこにとどまることはなく、その安定した統一は自己意識の運動の起点にすぎない。重要なことは、ここで、自己意識をさらに先にすすめるものは何であるのか、を明らかにすることである。

それは、二つ目の規定にやや抽象的にあらわされている。——「この直接性そのものは絶対的な媒介性であり、この直接性は自立的な対象の止揚としてのみ有る。つまり、直接性は欲求である。欲求の充足は、なるほど、自己意識の自己自身への反照〔省察〕であり、あるいは、真理となった確信である」(同上, c.98)。これを吟味してみるに、まず「この直接性そのものは絶対的な媒介性である」とは、自我が認識されていくと、自我の認識の最初にある直接性、自我の直接的認識が媒介性に転化するようになることである。それは何に関する、どのような意味を持つ媒介であるのかを言えば、何よりもまず、意識の自己帰還と、それに伴う「他のもの」に関する知の内容を自己のなかに引き寄せてくる(対自的存在にする)こととのための、媒介性への転化であろう。自己意識の生成以前の、事物に対する直接的な知の次元において、対象は自己にとって自立性をもつものであり、意識は〔まだ意識された自我という自己の軸がないのであるから〕その対象における付属物のように他在となり、外的対象に住まうような意識であったが、そうした「他のもの」への知も、意識の自己帰還とともに、自己の軸のまわりに引き寄せられる〔言い換えれば、外的対象の自立性は喪失する〕。つまり、自己意識によって、意識の自己帰還が生じるのと同じように、対象は自己意識にとって否定的なものであるとはいえず、「対象の自己への帰還」(同上, c.95)が生じる。このように、ここでの媒介性を理解する第1のモメントは、他在から自己への意識の帰還であり、外的事物の対自的存在化である。これは、純粋な意味での「他のもの」に関する知のとりあえずの終焉であり、自己意識の生成の顕

在化の始まりである。だが、ここまでは、まだ、トートロジカルな自我の相であると、ヘーゲルは考えている。

第2のモメントによって自己意識は運動し始めるが、このモメントの内容は、先の自己意識の予備的規定(b)の後半に述べられている「欲求」と「省察」である。ここでまず重要になるのは「生命」の概念である。「自己への反照〔省察〕のおかげで、対象は生命になった」(同上, c.94)というヘーゲルのことばが含意するものは、外的対象が自己にとってのもの、対自的なものとなり、生きいきとし、見えやすくなった、ということであろう〔補足〕。ここで自己意識は自己と有(ことに自己に帰還した対象)を区別しはじめるが、そのように区別される有は感覚的確信や知覚の様式のものであるとともに「自己に反照した〔省察された〕存在」(同上, c.95)でもある。ヘーゲルはここで「直接的な欲求の対象は生きたもの〔生命〕である」(同上)と述べて、その理由に、事物の「内面」に対する悟性の関係、その即自的、普遍的結論は「区別に値しないものの区別」(同上)に、いわば死んだ区別にもとづいていることを挙げている。この文脈から考えると、また、ヘーゲルの『精神現象学』が対象にしているのはもっぱら人間の知にあるのだから、彼の用いる「欲求」の語は知的欲求を表している。そして、悟性が事物の内面に入りつつも〔形式論理学がそうであるように〕事物の外側にある結論にたどりつくこと、を考慮すれば、欲求とは、より深く事物の内面へと浸透したいという欲求、言い換えれば、悟性から理性への移行を担うもの、と捉えてよいであろう〔この欲求の観点から悟性の行きつく先を特徴づけるなら、「自己自身の放棄」(同上)にもとづく普遍性である〕。

〔補足〕「生命」の概念をヘーゲルは次のように論理的に規定している。——「すべての区別の止揚性、軸をめぐる純粋な運動、絶対的に静止しない無限性としての無限性そのものの静止、運動の区別が溶解されている自立性そのもの、自己自身への平等性において空間の純粋な形式をもつ時間の単純な本質」。そして「自己自身の内部における純粋な運動の単純な流動的実体」(同上, c.95)とも述べられており、ここでの「生命」とは自己自身の内部における運動のことである。

ここに考察をとどめておけば、上記の第3の予備的規定——「自己意識の二重化」——は余計なものであろう。外的対象であったものが自己帰還し、考察される内的対象となり、それが生命を持ち、運動する。そして、生命にむけられた自己の欲求がその運動をより深く把握する、とだけ捉えるとき、意識している自己そのものは固定的なものになってしまう。ヘーゲルは外的であった対象が自己の内部で行う運動とともに、自己そのものの運動をも捉えようとする。つまり「発達しつつある自己の発達」(同上, c.97)がどのように生じるのかを認識しようとするのである。この点について、ヘーゲルは、自立的諸形成物の統一化、統一と分裂、「他のもの」である故の自立性と止揚、自己意識と生命の対立、生命を対象にする欲求による自我と対自的存在の再編、類と個などの弁証法的諸概念によって究明しようとしているが〔その各々の内容は省略する〕、小論にとって重要なことは、自己意識なしには対自的存在としての事物

〔意識された外的事物〕は生じないこと、自己の内部での統一と分裂は無限に〔その人が死を迎えるまで〕続くことであり〔ここでのヘーゲルの論理はその後に細胞学が明らかにした細胞分裂にもとづく新しい細胞の誕生と「アポトーシス」というプログラム化された細胞死とによる細胞の自己運動に似ている(Lewin, 2007 // 2008)〕、さらに、そこでの知の形式は自我が絡むことによって個性的形式になっていくこと、その形式において自己の自己意識と「他のもの」としての自己意識が生じること、そして、ここに「自己意識の二重化」が生まれること、である。これらは、根本的には、自己意識の生成による意識の自己帰還〔それと同時に起こる対象の自己への帰還、対自化〕の故に生まれる、自己意識における「自己のもの」と「他のもの」の相互浸透と対立性のなかで生じていることであろう。

ヘーゲルはこのような「自己意識の二重化」という論理的結論を、やや人格化し、それ故に、より現実近づいて、説明している。それは二人の個人——自己という個人(自己の自己意識)と他者という個人(「他のもの」としての自己意識)との関係である〔もっともこれは自己の自己意識のなかで生じていることなのであるが〕。自己意識の生成にいたるまでの知覚と悟性は「自己自身の放棄」を強い、「自己自身を他のもののなかに見る」(1807 // 2002 // 1997, c.99)ことをさせたのであるから、そのような意識の自己帰還の始まりにおける「自己のもの」と「他のもの」——二人の個人——は直接的な統一をなしつつ、その分解にあたって相互に承認しあっている(同上, c.101)。これを知の発達の側面に敷衍すれば、人はそれまでの感覚・知覚・悟性を肯定的に自己に取り込み、それらを自己のなかでシステム化しはじめることであろう。しかし、事柄は平坦には進まない。二人の個人(二つの自己意識)は——下僕と主人という形で——対立し、比喩的に言えば、生死をかけた闘争が行われ、やがて「絶対的主人の恐れ」(同上, c.105)とその克服を迎えることになる。自己の自己意識はここで下僕の自己意識として示されているものである。ヘーゲルは述べている——「自立的な意識の真理は下僕の意識である。なるほど、この下僕の意識は最初の頃には、自己の外側に現れ、自己意識の真理として現れない。〔中略〕〔下僕の意識の〕隷属性は自己に帰還する意識として自己の方に去り、真の自立性に戻るのである」(同上, c.104)。再び知の側面に敷衍しておこう。最初の頃に「自己の外側」に現れる真理とは、悟性の知のことであろう。しかし、それは「自己自身の放棄」を強いるという意味で「隷属性」をもたらしている。それは悟性の知が自己の納得を通して教えられたとしても、本質的には、主観性の克服という名のもとに「自己自身の放棄」が実現される、という点によく現れている。意識をめぐる中心軸は事物の方にあった。意識の自己帰還は「隷属性」の克服をもたらし、自己を軸にして、いままでの悟性の知を再吟味させはじめる。その再吟味の果てにあるものが自己にとっての知のシステム化であり世界像の構築なのである。その過程において「絶対的主人の恐れ」の克服——悟性の知を位置づけ直し、悟性による隷属からの脱却——が生じるのである。

そのとき、人は自己の論理と枠組を獲得し、自己意識の最後の段階、半ば理性の領域に足を踏み入れた段階である「自由な自己意識」(同上, c.107)に達する。ヘーゲルはそこにおいて、

かなり狭義の意味においては「思考」が働きはじめ、形象や表象ではなく概念のなかで対象が運動しはじめる、と考えている。その概念はまずは「私にとっての概念」「私の概念」なのである。これは、ヴィゴツキーの規定によれば、「意識の意識」としての自己意識であるが〔より正確には事物—意識—意識という新しい連関である〕、これをメタ意識と考えるのは事柄の一面しか捉えておらず、「私の概念」(同上)である点、自己意識はあくまでも自己への意識である点、つまり、ここでの「意識の意識」は個性的なものである点、を見逃してはならないであろう。

ここにある、ヘーゲルの「自由な自己意識」が含意するものの一つは、それまでの主観性と客観性の関係〔主観性の放棄としての客観性〕が逆転され、両者の新しい関係〔悟性的客観性から、主観性に導かれて獲得されるより深い客観性へ〕が切り拓かれることであろう〔補足〕。

〔補足〕2007年に出版されたオスカー・ブレニフィエらの著した絵本『大きな哲学的対立の本』(2007 // 2011 // 2012、邦訳『哲学してみる』)は、邦訳が出版された2012年にすでに世界19か国で出版されている、というのだから、真にポピュラーで画期的な哲学絵本である。その魅力の一つは、哲学書が論理によって論証するところをイラストによって著していることにある。たとえば、「自由と必然」という項には、「金魚鉢から跳び出す金魚」が描かれており、「狭い金魚鉢から跳び出すのが金魚の自由である」とか、「だが、そうすれば金魚は死ぬ以外にないのだから、金魚鉢のなかでのみ金魚は自由である」とか、あるいは、「重要なことは金魚が生きていく生存条件の必然をとらえることであり、金魚鉢から池に跳び込むなら、金魚はより自由である」など、イラストの提示によって多様な解釈が可能になる。この点できわめて教育的な絵本であろう。いま一つの魅力は、ヘーゲルの哲学がきわめて平易に描かれていることである。この絵本が対象にする項は「一つと多数」「有限と無限」「存在と外見」「自由と必然」「理性と情動」「自然と文化」「時間と永遠」「わたしと他者」「肉体と精神」「能動的と受動的」「客観的と主観的」「原因と結果」であり、その各々が対立と統一において一貫して語られている。

この絵本から「客観的と主観的」の項を取り出しておこう。出版されている日本語版は訳がクリアでないところもあるので、オリジナルのフランス語版とその翻訳であるロシア語版を参照して、訳出しておく。

「悲しいとき、私たちはコップは半分空っぽだと言い、幸せなとき、私たちはコップには半分入っていると言う。だが、コップには〔どちらの場合にも〕60ml 含まれていることを測ることもできる。

しかし、地球は丸い、重いモノは飛ぶことができる、あるいは、病気は微生物から起きる、と科学者が初めて主張したとき、彼は自分だけの危険な思想の持ち主あるいは痴れ者と批難されたのである。

それとは逆に、音楽家や詩人は、自分の感情を表現するとき、全世界に通じるもの——愛、苦悩、歓喜——を描くことができる……こうして、客観性を見つけるために、ときに私たちの主観性の果てにまで行かねばならないし〔ロシア語版では「主観性に導かれることが必要である」〕、ときに主観性を放棄しなければならないのである」(p.72)。

最初の Copp の事例は「主観性の放棄」を表しており、科学者と音楽家・詩人の事例は「主観性の果てにまで行く」ということを示している。

科学者の事例を現在進行中の事例で補うことができる。たとえば、万能細胞の一つである iPS 細胞の発見(創造)は、切断された指を自然に再生するヤモリに比すべき再生能力を人間も潜在的に具えているという山中教授の夢想(主観性)から始まった。人の皮膚細胞の内部に入り込んで得られた4つの細胞核の培養によって万能細胞が発見され、それが各国の研究機関によって実証されたとき、山中氏の夢想は客観的真理となった。これは自己意識の生成にともなう主観性が新しいものの理性的認識をもたらす、きわめて高度な一事例であろう。主観性と客観性の逆転、事物の「内面」への洞察が氏の発見と創造を支えている。

スピノザについて少々コメントしておこう。スピノザのなかに発達理論を見出したのはヴィゴツキーの卓見であるが、ヘーゲルがもっぱら知の発達を明らかにしようとしたのに対して、スピノザの視野は、身体—情動—思惟の諸連関の発達を扱ったという意味で、人間そのものの発達に及んでいる。その場合、「〔身体の〕状態の観念の観念」(1999, エチカ、第2部定理22証明)、言い換えれば「自己と自己の感情の認識」(同上、第5部定理4備考)、つまりは自己意識の生成が、「思考を動かす情動」から「思考から派生する情動」への(ヴィゴツキー、1935 / 1983 // 1982 // 2006)、より本質的には、身体—情動の連関から情動—思惟の連関への跳躍台である。ヴィゴツキーに導かれながら、スピノザの『エチカ』から以下のような発達をめぐる5つのフェーズを取り出すことができるであろう。——(1)「身体の状態」としての感情(エチカ、第3部定義3)。(2)「身体の状態の観念」としての感情(同上)、「思考をある方向に動かす情動」(ヴィゴツキー、同上)。なお「ある方向」とは、思考を促進するような情動の方向もあれば、思考を阻害し、甚だしくは感情を制御できない「隷属」(エチカ、第4部序言)の方向もある。(3)「〔身体の〕状態の観念の観念」(前出)、つまり「自己と自己の感情」の認識(前出)、いわば自己意識の生成。これによって「隷属」は克服される。(4)「思考によって動かされる情動」。言い換えれば、「人間は感情への支配力をもっており、理性は情念の秩序や連関を変更し、それらを理性において与えられた秩序や連関と照応したものにしうる」(ヴィゴツキー、1930 / 1982 // 2008)。(5)そのもっとも発達したものとしては、「神あるいは自然」の認識、いわば「自由なる必然性」の認識が最大限の満足〔人間の自由〕をもたらす(エチカ、第5部定理27)。

なお、ヴィゴツキーが前出の「遊びとその役割」のなかで言及したスピノザの言説は、(4)と(5)に位置づけられるものであり、それが幼児の遊びのなかで先取りのように現れているのであるが、それについては後述することにしよう。

### III 下からの考察

上述のように、ヘーゲルが描く自己意識の発達を理解するためのもっとも根本的な「区別」

は「自己のもの」と「他のもの」の区別であった。このことを念頭におきつつも、自己意識の生成よりも前にあり、つまり自我が意識され「自己のもの」が明瞭に意識される前の、幼児期、ことに乳児期や幼児前期において、原初的な統一をなす「ひとつのもの」は親しい大人と子どもであり、典型的には、母と子である。そして、その内部に生じ、やがて自己意識の生成にまでつながっていく「区別」をひき起こすものは、子どもの主体的側面であろう。

### 3歳未満の子ども

ヴィゴツキーは乳児についてきわめて興味深い規定を与えている。身体としては母から分離したものの、生物学的には未分離である(哺乳)。その後、生物学的に分離するものの、心理学的には未分離である。そこでの子どもの意識を、ヴィゴツキーは、私とわれわれがそこから分離してくる原初的な意識、「始原われわれ пра-мы」意識と呼んでいる(1932 / 1984 // 2002)。これらは、親しい大人と子どもは「ひとつ」の状態から始まることを示している。

その状態における子どもの主体的側面は独特な現れ方をする。それを示すヴィゴツキーの特徴づけは、乳児の初期の行為は「大人を介した行為」というものである。空腹、排泄、睡眠欲求などは泣くことや表情によって大人に伝えられる。ここでは泣くことや表情に子どもの主体的側面を見ることができが、それは大人への訴えということに限られる。ヴィゴツキーは、乳児は一日たりとも大人に依存しなければ生存できないという意味で最大限に社会的な存在であるが、そうした存在に不可欠なコミュニケーションの手段が最小限にしか保持されていない(言語の欠如)、と乳児を特徴づけ、そこに乳児の生活の根本的な矛盾を見出している(同上)。

子どもの感覚運動的機能の発達にともなって、外的対象への子どもの興味も広がっていく。それは子どもの主体的側面の発達ではあるが、なおも大人への独特な依存関係のなかにある。その点に関して、ヴィゴツキーは興味深い実験を紹介している。フィアンスの実験は、子どもの興味の対象とその距離の関係を考察するもので、興味をもった対象を徐々に子どもから遠ざけ、ある距離に達すると興味を喪失する、というものであった。興味の喪失を確認した後、親しい大人がその対象の隣りに現れると、対象への生きいきとした興味が回復されたのである(同上)。はいはいをするようになると、子どもの外的対象への興味はさらに広がるとともに独特な深まりを見せる。深まりというのは、ある行為が必ず同じ結果をもたらすことに興味をもつことである。たとえば、ティッシュペーパーの箱はそのことをよく表している。大人がティッシュを扱っているのを見たことがあるのであろう、はいはいができるようになり、手にすることのできる床のうえにティッシュペーパーの箱があると、子どもはそれに突進する。さすがに箱から最初のティッシュを引きぬき、下から次のティッシュが出てくるのを間近に初めて見たときにはちょっと驚いた顔をするが、その次からは笑顔である。大人が「あれあれ」と微笑みでもすれば、それを見て、子どもはいっそう勢いを得る。たちどころにひと箱が空になる。子どもにとってはまともな面白い探索であるが、大人にとっては「イタズラ」である。はいはいそのものがたいてい進行の途中で、後方にいる大人の顔を見て、またはいはいを再開す

ることが多い。また、1歳頃に発せられる有意味語の前には、喃語という意味を持たない発生が聞かれるが、その喃語が多く発せられるのは母のもとにいるときである(村井純一、1961 / 1968)。要するに、情緒的安定こそ子どもの主体的側面を発動させ、しかも、その主体的側面は大人への独特な依存のなかにある。

対象指示機能という点でことばの前駆とも呼べる指差しは、子どもの主体的側面と大人への依存をよく表している。ヴィゴツキーは指差しの成立の過程のなかに3つの相を見出している。——(1)興味のあるモノを取ろうとして不首尾に終わった把握的行為の相、(2)「〇〇がほしいのね」と大人が言い、そのモノをとってあげる意味づけの相、(3)子ども自らが行う指差しの相、である。ヴィゴツキーはこれらの相を「即自」「対他」「対自」というヘーゲルの概念を用いて説明し、その3つの相を心理機能の文化的発達的一般法則に高めている(1929 / 2003 // 2008, 1931 / 1984 // 2004)。だが、同時に、この時期に典型的な子どもと大人の関係をより情緒的に示している。

1歳代における子どもの主体的側面はことばの独特な発達のなかによく現れている。それは子どものオートノミカルな言語〔自律言語〕である。それは、語の意味論的側面から言えば、意味の汎化と呼ばれる現象である。1歳をすぎた頃の子どもが実際の犬を見て「ワンワン」の語を教えられ、喜んでその犬に対して「ワンワン」と言い続けた。これだけなら連合主義的結合を表すものであろうが、この子どもを間もなく動物園に連れていけば、初めて「ワンワン」の語を覚えたときの白い大型犬にちょっと似ているシロクマのみならず、似ても似つかないコンドルもキリンも、つまり眼にした動物をことごとく「ワンワン」と呼んだのである。この場合、「ワンワン」は動物の一般的表象〔共通表象〕を意味している、と捉えねばなるまい。この「ワンワン」は、ヴィゴツキーが述べたような、子どもは「バラ」よりも前に「花」の語を覚えること、かりに「バラ」の語を先に覚えたとすれば、その「バラ」は「花」の意味で用いられる(ヴィゴツキー、1934 / 2001 // 2001)、ということの、特殊な事例であろう。子どもは意識的に一般的な語から覚えるという訳ではない。しかし、重要なことは、大人が教えた通りにしか語を覚えなないなどと決して言いえないことである。言語習得における子どもの主体的側面は最初の有意味語から発揮されている〔補足〕。

〔補足〕ある失語症患者の錯語は、この意味論的側面において、示唆的である。この患者は、言語聴覚士による援助を受け、ことばの回復過程にある。その最初の課題は、絵を見て、それに対応する語を覚える、というものであったが、「消しゴム」の絵を見ながら発した語は、先に覚えた「エンピツ」である。患者本人が言うには、消しゴムの映像が頭に浮かび、「エンピツ」ではないと思いながらも、何度も「エンピツ」の語を繰り返した。これはこの患者の苦しみであった。もちろん、やがて消しゴムの語が登場してきたのであるが〔患者の家族からの取材より〕。この場合、エンピツの語は、実際のエンピツを表しつつも、エンピツも消しゴムも表しうるより一般的なもの、たとえば「文房具」を意味していた、と推論できる。子どもとこの患者の相違は、前者は無意識的であるが、後者は表象や

概念のうつすらとした記憶の故に、正確なことばにならないことを理解し苦しんでいる、ことである。

なお、幼児後期になると、語の言語論的側面から見て、きわめて明瞭な「造語」が現れてくる。「あおばい」の語は大人がそれを聞いても理解できない語である。子どもの説明によれば、「白いバイク」は「白バイ」というのだから、青いバイクは「青バイ」、赤いバイクは「赤バイ」なのである。さらに事例をあげれば、「ピンクいお花」「緑い葉っぱ」も同類のもので、これらは大人は決して言わないような語であるから、これらの「造語」は子どもの主体的側面の所産である。大人のことばの模倣なしにはこれらの語は産まれないが、模倣だけでも産まれない。これに類した子どものことばは英語にもロシア語にもある。子どものことばの諸事実を広く拾い集めた児童文学作家のチュコフスキーは、ここでは模倣は一つの創造の行為である、と特徴づけている(1990)。これもまた子どもの主体的側面をよく表している。

以上のことは、言語の本質に根ざした現象である。意味論的には、語は一般化する性質を帯びている(ヘーゲル、ヴィゴツキー)のであるから、子どものオートノミカルなことば、さらには、上記の失語症患者の「錯語」は、よく理解できる事柄である。ことばの獲得には一般化あるいは一般的表象が深くかかわっているのである。また、言語論的には、言語の起源は、ポテブニヤが指摘したように、神の創造でも一部の天才的な人びとの発明でもなく、人びとのなかでの誕生にある(1862 / 1999)。このことは語の歴史的変化や現代における変化が雄弁に物語っている。たとえば、私という意味の「われ」が生きる場はいまや俳句と短歌のなかしかないが、「われわれ」という語は日常生活のなかで生きている。「スマホ」という短縮された語は、全国紙においてさえ「スマートフォン(=高機能携帯電話、スマホ)」と表記され、記事のなかではスマホが使われている。最近では「スマートフォン(スマホ)」の表記が始まっている。そのうちに「スマホ(スマートフォン)」となる可能性もあるであろう。最初にスマホと語った人が誰であるのかは判らない(多分、若者であろうが)ので「人びとのなかで」と言う以外にはない。この語はおそらくスマートフォンが存在する限り生き続けるであろう。他方、メディアによる造語だと思われる「ホルモンヌ」(ホルモン好きの女子)の語はすでに瀕死の状態にある。このように、語は一瞬一瞬に生まれ死んでいく。いつの時代にもことばの「乱れ」を嘆く人びとがいるが、ことばは言語論的には上記のように「乱れ」ながら生き、そして死んでいくという本質を持つことを見逃してはならない。「あおばい」の語はそのようなことの個別事例である。

条件的に「自我」と「他のもの」という概念を使うとすれば、子どもの意識における「他のもの」はもっぱら大人であったが、そこには急速に身近な事物や状況が入り込んでくる。まだ自我が意識されていないのであるから、子どもが状況に心を奪われ、状況のなかに没入することに不思議はない。それは、ヘーゲルの表現すれば、いわば純粋な他在であろう。このことは、2歳児に典型的である状況拘束性〔場面的束縛性〕によく現れている。階段を見れば昇り降りがしたくなる、ドアを見れば開け閉めがしたくなる、鈴を見れば鳴らしたくなる——事実、そのような状況のなかにいれば、子どもは必ずと言ってよいほど、それらを行う。まるで、事物に誘発性が備わっているかのようである(ヴィゴツキー、1933 / 2003 // 1989)。

それは家庭用のツミキによる遊びにもよく現れている。この時期の子どもは、ツミキをその色や形や大きさに「分類」することを何度も繰り返して遊ぶ。それは真剣な遊びといわれるほど静かに行われるのである。ところが、2歳後半のあるとき、横に長くつながられた直方体のツミキの列を見て、「あっ、電車や」と言い、他のツミキをひとつ手にとって、「がたん、ごトン」とその列に沿って動かしはじめた。これは、モノの性質で遊ぶことからイメージで遊ぶことへの転換点である。それだけ、ことばが発達してきた証であるが、子どもの遊びはそこにとどまらない。3歳を過ぎたころ、この子は段ボール箱を持ちだして、そのなかに入って、「がたん、ごトン」と運転しはじめた。これもイメージの遊びではあるが、ツミキを線路と電車に見立てて遊ぶことと決定的に違うのは、自分が運転手になっていること、つまり、自己―他者が軸になっていることである。こうして、ヴィゴツキーが言うように、遊びとことばは状況拘束性から子どもを解放する(同上)。あえて言えば、それは、行為のなかに現れた、「意識の自己帰還」に類したものであろう。行為における他在からの自己帰還は短期間に凝縮して実現される。その仕上げである、イメージされた事物〔電車〕からイメージされた人間〔運転手〕へという軸の変化こそ、いわゆる「自我の芽生え」の一つの形態である。

### 3歳の危機とそれ以降

3歳の時期の「自我の芽生え」はよく子どもの「反抗」と結びつけて捉えられる。事実、子どもは「自分で」を連発し、その度に親は手を焼いている。それまで親にしてもらうことで安定を感じていた子どもが、もはやそのような生活は耐え難いかのように、「自分で」と言い出すのである。それは自我の最初の「意識」であろう。もちろん、それは「自分は何者か」というような内省的な意識ではなく、「私というものが有る」という発見であり、どう突き詰めても「私は私である」というトートロジーから一步も外に出られない即自的な「自己意識」である。ヴィゴツキーは、3歳の危機の本質的特徴は、自分の欲求に固執していることではなく、本当は自分のしたいことなのに「そうしてごらん」と大人から言われたのでそれをしない、という点にあり、彼はそれをハイポブリア(ギボブリア)、つまり、自分の欲求をあくまでも実現するという意志を貫徹しない、しかもそれは自分の感情の故にである、という意味で「意志薄弱反応」と呼んでいる(1933 / 2001 // 2012)。穏やかな事例をあげれば、それは、白い紙を見せて「白い紙だね」と大人が言えば、子どもは「黒やんか」と言ってニコリとするとところにも現れている。これは「私が有る」ということだけを知っている自我の発現である。

こうして、他在となって付着する意識にとって「他のもの」のなかで、外的対象と他者を二つの極にして意識は激しく変動する。2歳児における状況拘束性と3歳児における「反抗」がそれを如実に表している。そして、うつすらと姿を現す後者の自我の意識はトートロジカルな自己を護るかのように大人の見解の真反対の位置から出発する。

このことは子どもによる外界の認識にもあざやかに現れてくる。幼児後期の子どもが本当に不思議だと思ったときの認識の論理は、《自己の経験からのみ》取り出されたものである。た

たとえば、ある5歳児が京都の疏水〔一種の運河〕における水位の高低をどのように認識しているのか、という事例をもとに、この点を考えてみよう。疏水は、河床の掃除のときに、その水位が極度に低くなり、底が姿を現すほどになる。この子がいつも見慣れている疏水の箇所東西には二つの小さなダムがあり、それらによって水位が調節されているのだが、彼の論理は独特である。河の底には泥や石がある、泥や石も口が乾いたら水を飲むから、水位が下がる、というものであった。しかも、続けて、その理由らしきことを言っている——「夏の暑い日に〔園の〕砂場に水を撒いたら、水はすぐになくなった。あれは、砂も口が乾くから水を飲んだんやで」。疏水の水位低下もそれと同じだと言うのである。このように、子どもの外界の認識は、自己の論理にのみもとづき、主観的で、内容的には物語的であり、しかも、独特さはあるものの、きわめて論理的である。幼児後期の保育実践を通して問題を捉えたと、ここで重要なことは、こうした種類の独特な論理に多くの子どもたちが納得することである〔神谷・前田編著、2014を参照されたい〕。とすれば、この独特の論理は、純粹主観性の所産というよりは、純粹主観性と幼児の世代にとって一般的な「共通表象」とでも言うべきものの混合であろう。

ピアジェの概念を借用して、認知発達を説明しておこう。初期のピアジェは、リアリズム・アニミスム・アーティフィシャリズムと名づけられた子どもの認知内容の事実を丁寧に収集し、子ども独自の論理をとり出そうとした。その論理は自己中心性、後期になると認知的自己中心性と規定された。認知的自己中心性とは自己の視点からなら理解できるが、他者の視点から事物を見ることができない、という状態を表している。たとえば、4歳の子どもに「兄弟のお名前を教えてください」と聞けば、彼は「うん。一郎兄ちゃんと次郎兄ちゃんだよ」と答えられる。続けてこの子に「じゃあ、一郎くんの兄弟のお名前を教えてください」と次の質問をすると、この子は質問の意味が判らないという顔をして、じっと黙っている。自分の視点から理解できる同じことを、他者の視点から説明できないのである。このような認知的自己中心性を脱して、他者の視点、したがって、客観的視点から説明できることを、ピアジェは脱中心化と呼んでいる。ピアジェは感覚運動期—前操作期—具体的操作期—形式的操作期を思考の発達の具体的内容として取り出したが、そこに貫いている論理は、認知的自己中心性から脱中心化への移行である。彼は、形式的操作期が始まるおおよそ12歳頃に脱中心化が完成する、と考えている。

かなり単純であるとはいえ、認知発達に関するピアジェの説明原理には自己と他者が含まれているので、自我の問題を捉えようとする小論では、ここでは自己中心性〔または認知的自己中心性〕—脱中心化の概念を借用して考察をすすめることにする。とはいえ、小論のテーマは幼児期における自我の問題であるので、学齢期から自己意識の生成までの時期はごく簡単に触れるにとどめたい。

子どもの発達を検討する場合、概して必要とされることは、ある発達の相の考察はそれ以前の諸相のなかに自らの芽を見出さねばならないことである。自己中心性のなかに脱中心化を見出すという観点である。つまり、ここでは、幼児期における何が脱中心化や自己意識の生成を準備するものであるのか、を明らかにすることである。

あらゆる意識は最初は行為の形であらわれるという観点からすれば、幼児後期の遊びのなかに行為の形で脱中心化や自己意識の生成が現れる、と見なければなるまい。そのような行為の形とは何であろうか。

遊びと脱中心化の関連は、エリコニンが見事に指摘している。およそ遊びは子どもがやりたいことをするのであるから、ある意味では自己中心的な活動であるが、ごっこ遊びなどの幼児後期の遊びのなかでは、子どもは他者の考えや感情をいただき、他者の役を演じている。これは他者の視点に立ってものを捉えることであるので、それは脱中心化でもある(エリコニン)。もちろん、より正確には、行為における脱中心化なのであって意識そのものの脱中心化ではないが、脱中心化の先取りがそこにはある。

遊びには自己意識の生成を準備するものもあるであろう。それもやはり先取りなのであるが、ヴィゴツキーによれば、幼児の遊びのなかにはスピノザの理想の原型——「随意性と自由の王国」があるとされるが(1933 / 2003 // 1989)、それはスピノザの発達図式でいえば、自己意識の生成以降の(4)や(5)の相のことである。その直接的な意味は、遊びのなかにあるルールは内的ルールなのであり、それが遊び手を自由にする、ということであり、それは遊びのなかだけで実現されるという点では幻想的な自由だといわねばならないが、自由の感情を味わうことは事実であろう。自由の感情は13歳の危機に始まる自己意識の生成の底流に流れるものとなる。

さらにピアジェが自己中心的思考の一種であるアニミズムと特徴づけた子どもの認識やことばのなかにも脱中心化のモメントが認められる。たとえば、晩秋にわずかに木の上方に残るサクラの数枚の木の葉を見て、幼児後期の子どもは、どうしてあの葉っぱは木に残っているのか、と疑問が生じることがある。子どもたちはいろいろと考えをめぐらし、いくつかの解答を見出す。「あれは赤ちゃんの葉っぱや。跳び下りるのがまだ怖い、怖がりの葉っぱや」というのもその一つである。「怖がりの葉っぱ」というのは、自分があんな木の上から跳び下りるとしたら怖くてしかたがない、という子どもが自分の気持ちを言い表したものである点で自己同一化の認識なのであるが、同時に、それは他ならぬ木の葉の気持ちを洞察した点では他者の視点にたったことばである。この場合、自己同一化のことばのなかに他者の視点がふくまれており、脱中心化のモメントがそこにはある。

こうして、子どもの遊び、ことば、ことばで表現された認識のなかには、脱中心化や自己意識の生成のモメントが見出されるのである。

それに続く7歳の危機について、ヴィゴツキーは、子どもの内的生活と外的生活の一定の分化がみられ、その本質としては自己の内的体験の知覚があるとしている(1933 / 2001 // 2012)。知覚のレベルにおいてはあがあるが、「自己のもの」が「他のもの」からいつそうはつきりと区別されてくる。そして、13歳の危機において、ノーマルなレベルにおいて、「分裂機能」が生じてくる(1933n / 2001 // 2012)。ここにおいて、ヴィゴツキーはヘーゲルのいう「自己意識の二重化」に接近するのである。ヴィゴツキーがノーマルな分裂機能に着目するのは、事実的には、統合失調症における概念の崩壊から人格の分裂に至る過程を逆転させ、分裂機能から概念

形成への道を探ろうとしたためであろう。

#### IV 発達図式と自我

ヘーゲルは「精神」の段階にある自己のあり方を「『われわれ』である『私』、『私』である『われわれ』」(1807 // 2002, c.99 // 1997)と述べている。このテーゼは自立した諸個人のあいだにおいて成立する関係として解されるべきものであり、このゴールよりも過程の方がはるかに重要であるので、あまり強調したくないのだが、このテーゼが含意するものは、次のように考えられるであろう。悟性的認識への道、ピアジェの概念を借りるなら、自己中心性から脱中心化への道、より一般的には主観性から客観性への道——は、すすんで「自己自身の放棄」を差し出す普遍性への道であった。他方、自己意識の生成以降の理性への道においても、比喩的にいえば、自己中心性から脱中心化への道が、より正確には主観性から客観性への道が繰り返される〔補足〕。だが、もちろん、それは新しい段階においてのことであり、新しい内容を獲得したものとしての繰り返しである。そこでは、「自己自身の放棄」は起こらないし、むしろ、自己自身の主観性が不可欠な役割を果たす。主観性を帯びた広い意味での仮説なしにはこの第2のサイクルは始まらない。その過程の果てに、一旦獲得したと思われた客観性は、〔悟性の場合のような〕行き止まりの普遍性ではないのであるから、次々に広がりを持つものになる。そのたびに主観的な仮説が必要とされる。この過程を支える自己のあり方はヘーゲルの上記のテーゼの自己であり、そこで得られる客観性は、個別と特殊を内に含んだ普遍性——いわば具体的普遍性であろう。

〔補足〕ピアジェは『哲学の知恵と幻想』のなかで、やや感傷的に次のように述べている。「わたくしは、メルロー＝ポンティが、わたくしの脱中心化の理論について、それは、神そのものの観点に身を置いていたと言ったのをよく知っている。いささか誇張になるだろうが、しかし、それでもやはり、現象主義心理学者たちのような才能豊かな人たちの努力が、新しい中心化〔中略〕の方へと逆戻りするような方法論に彼らを追いこみ、結局、彼らの思想の価値を傷つけているのを眼のあたりに見るのは悲しいことである」(1965 // 1971, p.171)。筆者には、メルロー＝ポンティによるピアジェの特徴づけも、ピアジェによるメルロー＝ポンティの特徴づけも、どちらも正しいように思われる。ピアジェの脱中心化が「自己自身の放棄」を前提とし、それがその後の揺るがぬ原理であるのなら、それは「神そのものの観点」、より哲学的に言えば、悟性的普遍性となるであろう。他方、メルロー＝ポンティらの現象主義心理学が「新しい中心化」であるというのも正しい——ただし、ピアジェが込めた否定の意味ではなく、肯定の意味においてであるが。自己意識の生成は「新しい中心化」の一面を持つことは事実であり、そのことの意味は測り知れず大きいからである。

このように「悟性への道」と「自己意識の生成から理性への道」とを大まかに捉えたとする

と、ピアジェは明らかにこの2つ目のサイクル、新しい次元での自己中心性から脱中心化のサイクルを理解しなかった。いや、理解したとしても、自己の知的発達図式のなかに位置づけえなかったのであろう。心理学者としてのピアジェが自己意識の生成の事実を知らないはずはない。しかし、12歳頃に完成する脱中心化の直後、ヴィゴツキーの述べる13歳の危機から顕著な姿を表す自己意識の生成にかかわる概念、しかも知的発達に決定的な役割をはたすその概念は、ピアジェ理論のなかには見当たらない。脱中心化のあとにあるのは、ドラマの感じられない、退屈な、ただただ形式的操作として続く数十年の歴史である。

なぜ、そのようなことが起こるのか。その原因は、筆者には、ピアジェの発達図式の根底にあるものに、すなわち、子どもの発達を社会化とする捉え方そのものに存在するように思われる。3歳から7歳にかけて自己中心的言語〔ひとり言など〕の減少を子どもの社会性の増大と捉えるピアジェに対して、ヴィゴツキーはその減少を自己中心的言語の内言への成長と捉え、子どもの発達を社会化ではなく、社会的存在としての子どもの個性化と捉えるべきことを説いている(1934 / 2001 // 2001)。子どもの発達＝個性化という図式にとって、自己意識の生成と「私の概念」をそこに位置づけることは容易である。

ヘーゲルは悟性から自己意識生成への道を論理的には「意識の他在」(それによる意識の保存)と「意識の自己帰還」のモメントによって整合させ、「自己自身の放棄」と「自己意識」とを関連づけることに成功した。これに比肩しうるものはピアジェの脱中心化の概念には存在しない。なぜなら、脱中心化そのものが知的操作の論理ではあっても全体としての意識ではないので、上記の2つの項を関連づけるには、もともと無理があるからである。ピアジェに欠落するもの、欠落せざるを得ないものは「悟性から自己意識生成への道」である。

以上のようなパースペクティブのなかに幼児期の自我をおいてみると、それは第1のサイクルの起点にある。それは、内容的には、「私が有る」ということだけを知っている自己意識であり「私は私である」というトートロジカルな自己意識であった。3歳児の「反抗」はこのことに根ざしている。「自己のもの」と区別される「他のもの」の中心的モメントは、状況拘束性が示す外的事物を軸にした状況から、幼児後期の遊びが示すように他の人間つまり他者となる。行為のなかでのみ、脱中心化や自己意識の生成の先取りが始まるようになるが、彼の意識はまだそのことを意識していない。幼児期の自我とはそのようなものであるが、12歳にいたるまでの10年がここから始まるのである。

ルソーは15歳くらいの少年を念頭において、人間の第2の誕生を語ったが、これに倣いながら、これまで述べてきたことをまとめるなら、本当の誕生の次にくる第2の誕生は3歳くらいの自我の芽生えの時期であり、第3の誕生は思春期における自己意識の生成にある、ということが出来るであろう。2回目と3回目の誕生は、どちらも、自己から発している。即自的と対自的との大きな違いがあるものの、どちらの起点も広い意味での「自己意識」なのである。

〔付記〕小論は、2014年8月に開催されたフマニタスの会(会長＝岡田渥美京都大学名誉教授)の研究会で

の報告の一部を文章化したものである。参加者から有益なコメントや質問をいただき、問題を振り返って考える良い機会となった。記して感謝したい。

## 参考文献

- Brenifier, Oscar et Després, Jacques (2007 // 2011 // 2012), Le livre des grands contraires philosophiques, Nathan // Главная книга противоречий, М., Клевер-Медиа-Групп // 哲学してみる、村山保史・藤田尊潮訳、世界文化社
- Чуковский, К. И. (1990) От двух до пяти, М. Педагогика [チュコフスキー、二歳から五歳まで]
- Goldstein, Kurt (1948 / 1965), Language and Language Disturbances, NY., Grune & Stratton
- Гегель, Г. В. Ф (1807 // 2002 // 1997), Феноменология духа // То же, пер. Г. Шпета, Спб., Наука // 精神現象学、榎山欽四郎訳、平凡社
- 神谷栄司・前田美智代編著 (2014) 保育の四季―「こころ」の成長、三学出版
- Lewin, Benjamin et al (2007 // 2008), Cells // ルーイン細胞生物学、永田和宏他訳、東京化学同人
- 村井潤一 (1961 / 1968) 乳幼児の音声発達 / 村田孝次『幼児の言語発達』(1968, pp.31-2)のなかに、村井潤一の研究の要旨がまとめられている。
- Piaget, J. (1962 / 1997), Commentaire sur les remarques critiques de Vygotski concernant Le langage et la pensée chez l'enfant et Le jugement et le raisonnement chez l'enfant / Vygotski, L., Pensée et langage, Traduction de Françoise Sève, suivi de Commentaire sur remarques critiques de Vygotski de Jean Piaget, 3 édition, La Dispute, Paris, pp.501-16.
- ピアジェ, ジャン (1965 // 1971) 哲学の知恵と幻想、岸田秀、滝沢武久訳、みすず書房
- Потебня, А. А. (1862 / 1999) Мысль и язык / Собрание трудов Мысль и язык, М. Лабиринт [ポテブニヤ、思惟と言語]
- Спиноза, Б. (1999) Сочинение I, Санкт-Петербург, Наука
- Выготский, Л. С. (1929 / 2003 // 2008), Конкретная психология человека / Выготский, Л. С., Психология развития человека, М., Смысл-Эксмо // ヴィゴツキー心理学論集、柴田義松・宮坂瑋子訳、学文社 [ヴィゴツキー、人間の具体心理学]
- Выготский, Л. С. (1930 / 1982 // 2008), О психологических системах / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика // ヴィゴツキー心理学論集、柴田義松・宮坂瑋子訳、学文社 [ヴィゴツキー、心理システムについて]
- Выготский, Л. С. (1931 / 1983 // 2005), История развития высших психических функций, / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 3, М., Педагогика // 『文化的一歴史的精神発達の理論』柴田義松監訳、学文社 [ヴィゴツキー、高次心理機能の発達史]
- Выготский, Л. С. (1931 / 1984 // 2004), Педология подростка. Глава IX-XVI, Государственное учебно-педагогическое издательство, М.-Л. / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 4, М., Педагогика // 思春期の心理学、柴田義松・森岡修一・中村和夫訳、新読書社 [ヴィゴツキー、少年・少女の児童学、9～16章]
- Выготский, Л. С. (1932 / 1936 / 1984), К вопрос о психологии творчества актера / в кн.: П. М. Якобсон, Психология сценических чувств актера, М., 1936 / Л. С. Выготский Собрание сочинений, т. 6, М., Педагогика, 1984
- Выготский, Л. С. (1932 / 1984 // 2002), Младенческий возраст / Л.С.Выготский Собрание сочинений, т. 4, М., Педагогика, 1984 // 新・児童心理学講義、柴田義松・宮坂瑋子・土井捷三・神谷栄司訳、新読書社 [ヴィゴツキー、乳児期]
- Выготский, Л. С. (1933 / 2003 // 1989), Игра и ее роль в психическом развитии ребенка / Л. С. Выготский, Психология развития ребенка, М., Эксмо // ヴィゴツキー他、ごっこ遊びの世界、神谷栄司訳、法政出版、所収。[ヴィゴツキー、子どもの心理発達における遊びとその役割]
- Выготский, Л. С. (1933 / 2001 // 2012), Кризис 3 и 7 лет / Л. С. Выготский, Лекции по педологии, Ижевск,

- Удмуртский университет // ヴィゴツキー、「人格発達」の理論、土井捷三・神谷栄司監訳、三学出版、所収。〔ヴィゴツキー、3歳と7歳の危機〕
- Выготский, Л. С. (1933 / 2001 // 2012), Негативная фаза переходного возраста / Л. С. Выготский, Лекции по педологии, Ижевск, Удмуртский университет // ヴィゴツキー、「人格発達」の理論、土井捷三・神谷栄司監訳、三学出版、所収。〔ヴィゴツキー、移行期のネガティブな相〕
- Выготский, Л. С. (1933 / 1984 // 2006), Учение об эмоциях. Историко-психологическое исследование / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 6, М., Педагогика // 情動の理論—心身をめぐるデカルト、スピノザとの対話、神谷栄司・土井捷三・伊藤美和子・竹内伸宜・西本有逸訳、三学出版〔ヴィゴツキー、情動に関する学説〕
- Выготский, Л. С. (1934 / 2001 // 2001), Мышление и речь / Л. С. Выготский, Мышление и речь, М., Лабиринт // ヴィゴツキー、思考と言語、柴田義松訳、新読書社〔ヴィゴツキー、思考と言語〕
- Выготский, Л. С. (1935 / 1983 // 1982 // 2006), Проблема умственной отсталости / Выготский Л. С., Собрание сочинений, т. 5, М., Педагогика // ヴィゴツキー障害児発達論集、大井清吉・菅田洋一郎監訳、ふどう社 // 障害児発達・教育論集、柴田義松・宮坂瑋子訳、新読書社〔ヴィゴツキー、知的遅滞の問題〕